狼と狼の物語　―間―

鹿野　魁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼と狼の物語　―間―

【Ｎコード】

Ｎ６４３１Ｊ

【作者名】

鹿野　魁

【あらすじ】

狼と狼の物語シリーズ第三弾。今回は幕間のようなものです。第一弾「―赤―」第二弾「―灰―」もよろしくお願いします。

カインの場合（前書き）

前作「狼と狼の物語　ー灰ー」
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８６２８ｈ／
を先に読むことをオススメします。

カインの場合

薄暗い部屋に、壮年の男が一人立っていた。白髪の混じり始めた髪は、油で丁寧に撫で付けられている。皮膚にはしわが刻まれ年齢を感じさせるものの、男の姿勢はしっかりとしている。また、瞳に宿っている光は、ただの老人には似つかわしくない意思――と言うよりは野望を示していた。

服装はゆったりとした法衣を着ており、赤ワインの色のそれの中心には、大きく十字架が金糸で描かれている。高い帽子に描かれているのも同じ模様だ。

部屋は持ち主である男が壁から壁まで歩いたとして、ゆうに九歩分はあるだろう広さだ。この部屋を使うのが初老の男だけ――つまりここは男の部屋なのだ――ということを考えると、十二分すぎる広さだと言える。部屋の南には大きく窓がとられていて、光はそこからさしている。光にさまざまな色がついているのは、窓がただのガラスではなくステンドグラスだからだ。ステンドグラスで描かれているのは、神話の一説。

北の壁には扉があり、東西の壁と北の壁の残りには、天井まで届く本棚が隙間無く並べられており、本棚の中にも数多くの書物が所狭しと並べられていた。

部屋の中心には机、その上には燭台が一つ置かれている。ろうそくはあるが、火は灯されていない。普段ならば昼間は外の陽の明るさで十分なのだが、今日は生憎と曇っている。にも関わらず蝋燭を点けていないことが部屋が薄暗い原因のようだ。

男は手を腰で組み、ステンドグラスを無言で見上げている。表情の無いその顔からは、何を考えているのか読み取れない。

ふと、扉がノックされる。

「教皇様、お時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「誰ですか」

壮年の男――教皇がゆっくりと振り返りながら誰何すると、扉の向こうからは若い男の声で返答があった。
「狼です」
狼、と言うのは個人の名前では無く、教皇直属の機関名だ。秘密裏の機関であるため、所属している者たち個人を識別させないために必要最低限彼らは「狼」と表現される。
「入れ」
返答を聞いた教皇の口調と声色が変わる。口調は丁寧だったものからぞんざいなものに、声色も余所行きの声から地声に変わったのだろう、少し低くなっている。
「失礼します」
そう言って部屋に入ってきたのは、こげ茶色の長髪を藍色のリボンで結んでいる男だ。なぜか左頬には青い痣がある。目は澄んだ琥珀色をしており、それは陽の下で見ると太陽のように煌くのだろう。服装は黒一色。教会に属している者の、基本的な服装だ。
入室してきた男が扉を閉め切ったのを確認してから教皇は口を開いた。
「今日のお前はどれだ」
教皇が発した「どれ」という言葉。それは人に対してでは無く、物に対する言葉だ。
「カインです」
跪いて男が答える。答えた男の言葉の意味、それは数字の八だ。男――カインの名はもちろん本名ではない。八番――それが今日、男に与えられた名前だ。
教皇が「今日のお前」と言う様に、カインの名前は毎日変わる。それは、もちろん狼において「個人を識別させない為」だ。名前は呼びかけるために不便だからあるだけで、狼達には個人が無い。その証拠に、彼らは狼になった瞬間に戸籍を消されている。狼のうちの一人が死のうが、それは狼の死ではない。
「ならカイン、早速報告をしてもらおうか」

教皇が机に納まっていた椅子を引いて上質なそれに座る。対するカインは扉から三歩の位置で跪いたままだ。許可も無いのに教皇の傍に近寄ることは許されていない。
「はい」
カインが語りだしたのは、自分に与えられていた任務の顛末だ。隣の国へ赴き、王族の結婚相手を見極める。それが、カインに与えられた任務だった。隣国は教皇の支配下にあるため、勝手な婚姻で王族に力を持たれては困る。教会関係者で無いと結婚式を執り行えないようにしたのもその為だ。さらに、教皇はしばしば結婚相手を見定めるように狼に命じる。それは、いざと言う時にはその相応しく無い結婚相手を「外れ物」として処分するため。
「外れ物」とは、その名の通り人の道を外れたものだ。具体的には、人が持っていない力を使って人に害を与えるもののことを言う。人道を外れた時点で人とは見なされないため、外れ「者」ではなく外れ「物」と言われている。
「――隣国の件については以上です」
カインが報告を締めくくる。
「分かった。じゃあ、引き続き任務の経過について聞こうか」
机に頬杖をついた教皇が、嗜虐的な笑みを浮かべた。
「……はい」
答えるカインの声は暗い。と言っても教皇に気付かれない、それこそ普段傍にいる者にしか分からないような変化だが。
変化を悟らせないような調子で、カインは続ける。
「あいつ――今日はトセと名乗っていますが、前回の任務でおかしな行動はしていませんでした。教皇様の任務遂行だけを考え、行動していたように思います。昔付き合っていた彼女と同じくらいの年齢の女性を殺すことも、この私を殴ることも躊躇いませんでしたから」
カインが教皇から受けている任務は二つだ。一つは、先ほど報告を終えた隣国の王子の結婚相手を見定めること。そしてもう一つは

――
「昔からの友人であるお前が裏切っていると知ったら、あいつはどう思うかな？」
――セトと呼ばれる、耳飾りをつけた男の行動を、知る限り報告すること。
教皇の言葉に、カインは跪いて床を見つめたまま無言で答える。
「なかなか、お前もつまらない性格になってきたな」
カインは無言だ。
教皇は大きくため息をつくと、頬杖をついていない右手で何かを追い払う仕草をした。
「もういい、下がれ」
その言葉にカインは立ち上がると優雅に礼をする。
「失礼します」
カインが振り返りドアノブに手をかける。
「待て」
「はい」
掛けられた静止の言葉に、カインは少し疑問を抱きながら振り返った。
「後で新しく入った狼がいるだろう、そいつを呼べ。次の任務を渡すからとな」
「タミール一人だけ、ですか？」
彼が一人で任務をこなすには、まだ時期が浅いような気がするが。
ちなみにタミールと言うのも数字の名前だ。表す数字は五。新入りであるタミールのほうがカインよりも数字が若いが、そのことには特に意味は無い。
「次の任務は老婆から話を聞きだすだけだ。入ったばっかりのあれでも十分対処できるだろう」
カインは考える。話を聞くだけだとしても、結局はその老婆を殺す――処分させるのであろうと。
気がつくとカインは自然と教皇に対して跪いていた。

「その任務、私も同行させてはいただけませんか？」
本来ならば狼の任務に融通は利かない。しかし、カインは今回だけは退く訳にはいかなかった。タミールに一人で任務をさせたくない、と言う理由からではない。任務教皇からの叱責や処罰を覚悟の上で願い出る、それだけの他の理由がカインにはあった。
教皇が冷めた目でカインを一瞥する。
数拍の間。
「……いいだろう。丁度お前に任せる任務も無いところだからな」
興味なさげに発せられた教皇の言葉に、カインは思わず顔を上げてしまい、慌てて下げなおす。
「ありがとうございます」
嬉しさを滲ませてカインが礼を述べる。が、教皇はただ一言「去れ」とだけ言った。
その言葉に無言でカインは立ち上がると、一礼をし、扉を開けて外に出る。
扉が閉まる音がした。

カインの場合（後書き）

１０／０１／３１　推敲
０９／１１／０８〜

トセの場合

薄暗い部屋の中心にある机に肘を突き、壮年の男が物思いにふけっていた。両肘を立て手を組み、その上に顎を乗せている。目は伏せているため、一見すると寝ているようにも見える。男が着ているゆったりとした法衣は赤ワイン色で、法衣の中央――胸の辺りには金糸で大きく十字架が描かれている。同じ色の高い帽子にも同じ模様が描かれており、その下の白髪交じりの髪は丁寧に油で撫で付けられている。

男一人のための部屋にしては広すぎる部屋の南には大きなステンドグラス。そこに描かれているのは神話の一説だ。対する北の壁には扉があり、扉と窓以外の壁には天井まで届く本棚が隙間無く並べられている。もちろん、本棚の中にも数多くの書物が所狭しと並べられている。

ふと、風も無いのに蝋燭の炎が揺れて男の顔を照らす。机の上に置かれた蝋燭は、つい先ほど灯されたものだ。

「教皇様、お時間よろしいでしょうか？」

扉の向こうから聞こえた声に、男――教皇がゆっくりと目を開く。

「狼です。報告に上がりました」

「入れ」

「失礼します」

扉を押し開いて入ってきたのは、黒髪黒目の青年だ。髪の長さははぎりぎりうなじで束ねられるぐらいで、左耳には細かい装飾が成された耳飾りをつけている。着ている服の質は上等だが、なぜだかあちこちが少し破れている。まるで、剣で切られたかのようだ。

青年は優雅に礼をすると、そのまま絨毯の上に片膝を立てて跪く。

「今日は、トセと申します」

改めて名乗り直す青年。狼と言う名も、トセと言う名も、青年の名であって名でない。狼とは、青年が所属する組織の名前であり、

トセとは、今日限りの名だからだ。
青年――トセが所属している組織、狼は、教皇直属の部隊だ。主に、外れ物を対象とする任務をこなしていることが多い。外れ物とは、人外の力を持った人に害をなす物だ。始めはどれも人間だったのだが、異端の力を手に入れ、人に害をなした時点で「物」扱いされる。人道を外れたものは、既に人ではないのだ。
外れ物を処分する、それが狼の任務だ。任務は秘密裏に行われることが多く、そのため「狼」も個人を特定できないような仕組みになっている。名前に関してもそのうちの一つで、青年のトセと言う名は数字の十三を表す。名前は毎日無作為に当てられるのだ。
「報告をするなら早くしろ」
お前なんかに割く時間は無い。
教皇は言外にそう含ませて言い捨てた。
「分かりました」
トセはただそれだけを言って小さく頷くと、そのまま任務の報告を続けた。
トセに与えられていた任務は一つ。隣の国へ赴き、王族の結婚相手を見極める。
教皇の支配下にある国は多く、隣国もその中の一つだ。教皇が支配している国々に王は居るが、いくつか教皇から制限が掛かっている。その中の一つが「自由な婚姻の禁止」だ。特に国を跨いだ王族同士が結婚などをして力を持たれては困る。そのため、結婚式は教会関係者が執り行うのだ。
今回派遣されたのがただの教会関係者ではなく「狼」だったのには理由がある。もし結婚相手が相応しくなかった場合、結婚相手を「外れ物」として処分するためだ。その場合結婚相手が本当に外れ物であるか否かは問題ではない。問題なのは「教皇にとって有益か否か」だけである。
「――これらの流れから今回はアスクモアとサンドリヨンの婚姻を認め、私とカインの管理化の下で結婚式を執り行いました」

トセはそう言って報告を締めくくった。
「そうか」
教皇はそう一言だけ呟いた。報告を聞いている間も、そして今も、教皇の顎は組んだ手の上で瞼は閉じられたままだ。
トセはどうするべきが少しの間逡巡したが、結局そのまま待つことにした。邪魔ならばそう言うだろうし、用があるなら言葉を続けるだろう。
そうトセが考えてから五拍ほどの沈黙の末、教皇が再び口を開いた。
「ところで」
続く言葉は何かと、トセが少し身を硬くする。
「カインは役に立ったか？」
前回の任務で共に働いた、長髪の男のことだ。
トセは乾きかけていた唇を軽く舐めて湿らせると、言葉を紡いだ。
「全く。ほんの少しも役に立ちませんでした。剣の腕ならそこらの傭兵のほうが立つでしょうし、あのような薬草への知識など、そこらの医者なら最低限の教養として身に付けています。どうして彼が狼でいられるのか不思議なくらいです。もし――仮にですが私に意見が許されるのであれば、彼の狼の資格を剥奪しろと私は言いたいですね。なんなら、私から引導を渡しても構いません」
急に饒舌になったトセの言葉を教皇はどのように受け取ったのか、ただ、「ふむ」とだけ呟いて顎を撫でた。
「まあ、奴には次の任務をもう与えてあるからな。もう少し様子を見ることにしよう」
続く教皇の「下がれ」という言葉にトセは無言で一礼すると、教皇に背を向けドアのノブに手を掛けた。
「トセ」
呼びかけにトセが振り返る。
「親友で幼馴染のお前がそのように言っていたと、カインが知ればどう思うかな？」

教皇はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべているが、応えは求めていないようだ。

そう判断したトセは、眉一つ動かすことなくそのまま一礼すると、退室した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6431j/

狼と狼の物語　－間－

2011年2月9日15時55分発行